

10. 縄文人の祈り・墓

見学の重点

縄文時代の墓や祭りに関するコーナーです。遺体を埋めた土器や、祭りに使われた道具を展示しています。また、1980年に八ヶ岳のふもと北杜市大泉町から発見された金生遺跡の2号配石遺構を復元した模型を展示しています。この遺跡は縄文時代の人々が神に祈りを捧げた所ではないかと考えられています。その上のパネルには、遺構をもとにして、金生遺跡の想像復元図が描かれています。

- ①縄文時代には亡くなった人をどのように埋めたのでしょうか。展示されている道具を見たりパネルの解説を読んで調べてみましょう。
- ②縄文時代の人々はいったい何を祈ったのでしょうか。金生遺跡の復元模型を見ながら考えてみましょう。
- ③縄文時代には祈りの道具としてどのようなものが用いられたのでしょうか。展示されている道具や復元模型の中からさがしてみましょう。

縄文時代には人が亡くなると、ふつうは深さ1m程の穴を掘って死体を埋葬しました。また、中期から後期にかけて中部地方や関東地方西部に流行した風習に「埋甕」があります。住居の入口部分や集落の中心に甕を埋める風習で、逆に埋められて底に穴があけられたものが多いようです。市川三郷町の宮の前遺跡では、高さ55cmもの大きな甕2個が逆さに埋められていました。1個には底に小さな穴があけられていました。住居の入口の埋甕は胎盤を入れて子どもの成長を祈ったもの、集落の中央の埋甕は死亡した乳幼児を埋葬するのに使われたものとも考えられています。狩りと採集によって食料を手に入れていた縄文時代の人々は、山や川など自然の中に神が宿ると信じ、恐れ、



宮の前遺跡埋甕(市川三郷町)

敬い、そして自然を大切にしました。自然を荒らせば食料が足りなくなることを縄文人はよく知っていたのです。1980年に八ヶ岳山麓の北杜市大泉町から発見された金生遺跡は、縄文人が自然に感謝し、子孫の繁栄を願って、神に祈りを捧げた所ではないかと考えられており、当時の人々の考え方を知る上で貴重な遺跡なので、1983年に国史跡に指定され、史跡整備が行われました。縄文後・晩期の住居跡、壮大な配石遺構、集石遺構、石を組み合わせた墓などが数多く発見されています。石材はほとんどが付近で手に入る八ヶ岳原産ですが、中には数km離れた釜無川から数日かかりで運び込んだものもあります。縄文時代の遺構は保存状態が良く、石剣や独鈷石、大小の石棒、丸石、ヒスイ製の垂飾、200以上の土偶など祭りで用いられたと思われる遺物がたくさん発見されています。また、シカ、イノシシなどの動物の焼けた骨も多く出土しており、祭りに関係があるものとも考える人もいます。



金生遺跡の祭りの跡(当館展示)

石棒は円形か楕円形の棒状の磨製石器で、端がこぶ状に盛り上がっています。配石遺構や住居内部、集落広場などに置かれたり立てられています。中期には2mを超えるものもありましたが、後晩期には30cmほどに小型化します。この形の特徴から、生産・再生の祭祀や祭祀者の地位をあらわすシンボルとみなされています。人々はこれらの信仰の道具を使って、食料が多く取れることや子どもがたくさん生まれて元気に育つことなどを祈っていたのかもしれない。

その他、館内に展示してある土偶、装身具(首飾り、耳飾り)なども、まじないや祈りに関係あるものとも考えられています。

11. 土 偶

見学の重点

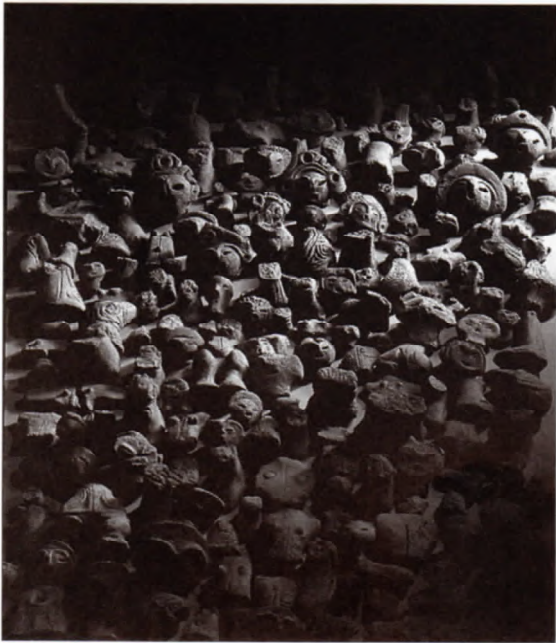
縄文時代に作られた土の人形を土偶といいます。このコーナーでは県内各地から出土した土偶を展示しています。土偶から、当時の人々の信仰のほかに、服装や風俗・習慣を知ることができます。

①土偶は何のために作られたのでしょうか。土偶の形や出土状態などから考えてみましょう。

縄文時代に作られた土の人形を土偶とよんでいます。土偶は早期から晩期まで各地に見られ、女性を表現しています。乳房がはっきり作られていて、中にはおなかが大きくてもうすぐ子どもを産みそうなものもあります。板状の抽象的な形態から立体的で写実性のある形態まで多様です。完全な形で発見されるものが少なく、手足や頭、胴がばらばらに集落から出土します。

笛吹市一宮町と甲州市勝沼町にまたがる^{しかどう}釈迦堂遺跡からは、中期の立体土偶を中心に千個以上の土偶が出土して注目されました。1つの遺跡から出土した土偶の数としては、青森県三内丸山遺跡に次ぐ数多さを誇っています。ただし、完全な形で出土したものは1点もなく、頭、手足、胴などの一部が欠けていました。

土偶の多くが女性を形どっていることから、一種の安産祈願や大地の母神を表しているという考え方は多くの人によって支持されてきました。自然の豊かな恵みを祈るお祭りの後、破壊してまかれたとも考えられています。



釈迦堂遺跡出土



金生遺跡出土



中谷遺跡出土
(都留市)



桂野遺跡出土
(笛吹市御坂町)



獅子之前遺跡出土(甲州市塩山)



中丸遺跡出土
(笛吹市御坂町)



金生遺跡出土



鑄物師屋遺跡出土(南アルプス市)



坂井遺跡出土(韮崎市)

12. 稲作の始まり

見学の重点

大陸から米作りが伝えられると、それまでの狩猟・採取の生活から自分たちで作物を作る生活が始まりました。その頃を「弥生時代」とよんでいます。弥生時代の水田のようすを、当時の水田に残された足跡と水田の断面土層、水田の写真等を使って示してあります。次に、土器の底に付けられた^{もみ}粃の跡や炭化米を拡大鏡でものぞけるようになっています。さらに稲作に使われた農具が展示してあります。

- ①弥生時代の水田は、現在のものと比べてどのような違いがあるでしょうか。県内で発見された弥生時代の水田の様子を観察してみましょう。
- ②弥生時代にはどのような農具が使われていたのでしょうか。展示してある農具を調べてみましょう。
- ③弥生時代には石包丁を使って稲をどのように収穫したのでしょうか。実物の石包丁を見て考えてみましょう。
- ④稲作が始まったことによって、弥生時代には生活や社会の様子がどのように変わったでしょう。縄文時代のくらしと比較して考えてみましょう。

今から 2,300 年前の紀元前 3 世紀頃から紀元後 3 世紀の前半頃までの約 600 年間を弥生時代とよんでいます。大陸から稲作や金属器を使う技術が伝えられ、米を食べる暮らしが始まった時代で、日本の歴史の中で非常に激しく社会が揺れ動いた時代の 1 つだといわれています。日本への稲作が伝わった道は、大陸から東北地方へ伝わった水稲ルートと、九州地方南北の 2 地域へそれぞれ伝わった陸稲ルートの 3 ルートが考えられています。山梨県へ弥生文化は、長野県から八ヶ岳南麓の北巨摩地域へと、東海地方から富士山麓、甲府盆地への 2 つのルートで伝わりました。アジアで栽培されている稲のほとんどは粒の丸いジャポニカ(日本型)と長粒のインディカ(インド型)ですが、日本に伝来し、稲作の中心となったのは、今日、私たちが食べているのと同じ丸い粒のジャポニカ米の一種で、あかごめという粃の先に毛がのびている米などです。あかごめは現在の毛のない品種に比べて、寒さに強く、栽培にも手がかからないといわれます。

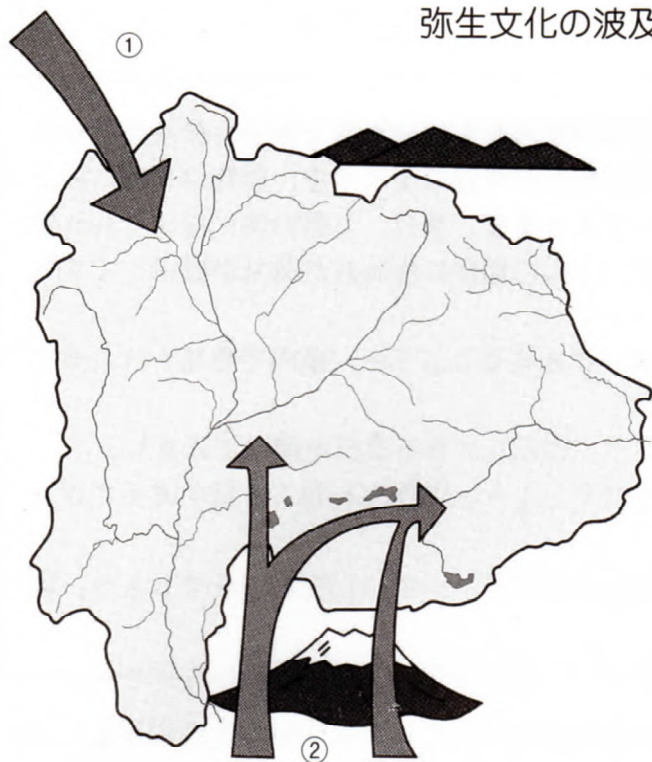
初めのうちは、稲は自然の沼地や湿地を利用して作られましたが、しだいに扇状地を開発して作られるようになりました。収穫は稲の穂先だけを長さ 15 cm 位をめぐりに石包丁などを使って摘み取りました。石包丁は半月形や長方形に作った石板で、稲の穂首を刈り取る道具です。稲の収穫に石包丁が使われたのは、鉄器がまだ貴重品だったためです。収穫した粃は高床倉庫に保存しました。倉庫には鼠返しの板を付けるなど、貯蔵してある種粃を守る工夫がしてありました。

弥生時代の代表的な農具は鋤と鍬で、形と大きさは今のものと変わりません。刃先まで全部木でできている点が違うだけです。中期の終わり頃になると、鉄の刃先を取り付けた鍬や鋤も現れますが、まだ木製の物の方が一般的だったようです。

稲作が始まると、協力して水路や水田を造り、農作業をする人々を指図したり、土地や水をめぐり争いをおさめたりする指導者が出現しました。やがて指導者はムラの人々をまとめる有力者になっていきました。こうして、稲作が始まることによって、貧富の差、身分の違いが生まれてきました。さらに、力の強い人物がまわりのムラを従え、各地で小さなクニが作られます。小さなクニはより力の強いクニに統合されていき、西日本を中心にいくつかのクニが作られていきました。

山梨県では、昭和 53(1978)年、竜王駅北側の^{かね}金の尾遺跡で初めて大規模な弥生時代の集落跡が発掘され、住居跡から炭化米や粃の圧痕のある土器が出土しました。次いで平成元(1989)年笛吹市八代町身洗沢遺跡で県内で初めて水田跡が発見され、山梨県でも稲作の具体例が知られるようになりました。水田の中からは弥生時代の農具である鍬、エブリなどが発見されました。近年、^{むか}葎崎市の宮ノ前遺跡で発見された水田は、県内でもっとも古いものとされるほか、南アルプス市の向河原遺跡や村前東 A 遺跡などから弥生時代の水田跡が発見され、当時の生活の様子が明らかになりつつあります。また弥生時代の水田は 1 枚が 5 m² ~ 20 m² 前後のものが多く、現在のものと比べるとずいぶん小さいものでした。

弥生文化の波及



- ① 中信地方から八ヶ岳南麓や北巨摩地域へ
- ② 東海地方東部から富士北麓・桂川流域へ
および御坂山系を越えて甲府盆地へ



宮ノ前遺跡の水田跡



みみらいざわ
身洗沢遺跡で発見された弥生時代の足跡



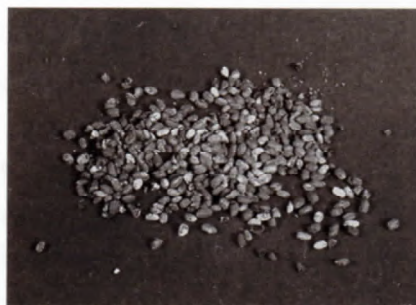
身洗沢遺跡で発見された弥生時代の農具



稲穂の刈り取り



脱穀のようす



炭化米



いしぼうちよう
東山北遺跡出土石包丁

1.3. 弥生時代のムラのように

見学の重点

このコーナーでは、弥生時代の住居跡の様子や、それらの遺跡から出土した弥生土器、日常生活で使われた石器を中心に展示してあります。

- ①縄文土器と見比べながら、弥生土器の模様や形の特徴を観察してみましょう。
- ②弥生土器の代表的な3つの器種を、展示してある土器を見比べてさがしてみましょう。
- ③弥生時代になって人々はなぜ低い平野に住むようになったのでしょうか。考えてみましょう。

弥生土器が初めて発見されたのは明治17(1884)年のことです。東京都文京区本郷の弥生町で発見されたので弥生土器と名付けられました。弥生土器は縄文土器と比べて、作り方・形・色・使われ方に大きな変化がみられます。弥生土器を代表する器には、煮炊き用の甕かめやものを貯蔵する壺つぼ、食べ物などを盛り付ける高坏たかつきなどがあり、用途に応じて器種を使い分けるようになりました。

弥生時代には甕の中で米を煮て今の粥のようにして食べていたといわれています。

土器に付けられた模様は縄文土器に比べて装飾性に富んではいませんが、櫛で引っ搔いた条線や波模様の波状文、すだれ文、縄文などがあります。また、信州地方の影響を受けた表面に真っ赤な朱(硫化水銀)やベンガラ(酸化鉄)などを塗ったものなどもあります。

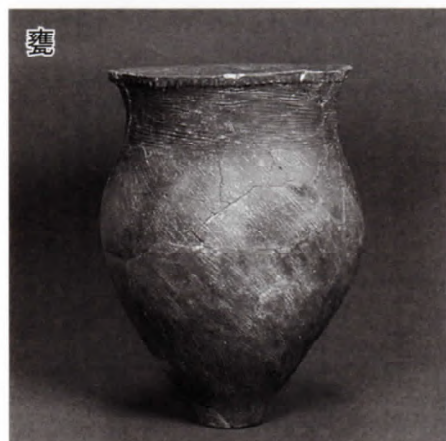
日常生活に使われた道具としては、土を掘る石斧・金刃物を研ぐ砥石・紡錘車ぼうすいしやなどがあります。紡錘車は糸を紡ぐ道具で、石や土で直径3cmほどの円盤を作り、中央に棒を通してこれをコマのように回して麻や絹などの繊維によりをかけます。こうして作った縦糸と横糸を機はたで織って布を作りました。目が細かくて軽い布が手早くできるようになりました。織物は農閑期の女性の仕事だったようです。

稲作の発達とともに、人々は水がかりのよい低い平野の中の小高い所を選んで集落を営むようになりました。弥生時代の住居は隅の丸い方形の竪穴住居で、4~5本の柱で屋根を支えています。炉は奥まった2本の柱の中央にあり、そのまわりで料理をしたことでしょう。住居の入口付近には土器や木の実、稲などを保存する穴があります。柱で囲まれた土間の真ん中は食事や家族団欒の場所、その両側は藁わらなどを敷きつめて寝床に使ったようです。稲を貯蔵した高床の倉庫の柱の跡も発見されています。また、集落に接して方形周溝墓ほうけいしゅうこうぼや土坑墓どこうぼなどの集団墓地が見つかることもあります。



集落のようす

●弥生土器



甕

煮炊きなどに使用



壺

米や**もみ**を蓄えておくために使用



高坏

盛りつけや祭りなどに使用

14. 大陸からの新しい文物や祭りの伝来

見学の重点

このコーナーには、弥生時代に稲作とともに大陸から伝えられた様々な遺物を展示しています。鉄器や銅製品、ガラスなどが各地の遺跡から発見されます。これらの遺物がどのように使われたのか調べましょう。

- ①銅で作られたものにはどんなものがあるでしょう。
- ②ガラスの玉が発見されています。どのように使われたのでしょうか。
- ③弥生時代の矢じりは銅や石で作られています。石の矢じりは磨製石鏃で、縄文時代の矢じりより大きく重いものです。どのように使われたのでしょうか。

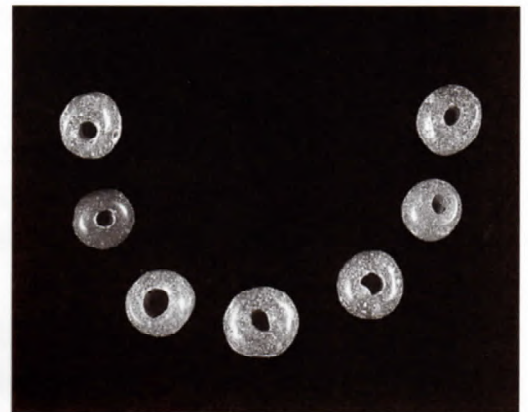
弥生時代には稲作とともに青銅や鉄の道具、ガラスの装身具などが大陸から伝えられました。青銅器のうち銅剣や銅矛、銅鐸などは長野県や静岡県から西側の地域で発見されています。やがて、実用品というよりは祭りの道具として日本国内で作られるようになりました。山梨県内では銅製の鏡や指輪・腕輪が南アルプス市長田口遺跡や甲府市下向山町の東山北遺跡の墓などから発見されています。

また、鉄の道具も農耕具や武器として伝来しましたが、農耕具は貴重品なので小さくなるまで使用されたため、現存する物はごく少ないです。武器や装身具では北杜市長坂町頭無A遺跡の方形周溝墓から鉄剣や螺旋状腕輪が発見されています。

ガラス玉は墓の中から出土することが多く、身分の高い人物の墓に副葬されたのでしょうか。ガラスは遠く西アジアから伝えられた技術により、大陸から日本に伝えられたものです。このほかに布を織る技術や染色技術なども伝来したと思われます。

また、木製の祭祀道具や武具なども全国で発見されています。渦巻き文様を彫った木製よろいは、静岡県浜松市伊場遺跡から出土していますが、山梨県ではよろいの一部と思われる物や儀式用の木製剣が発見されています。

大きな磨製石鏃は戦の道具といわれています。稲作が伝来し、農耕が発達すると農地や水をめぐる争いが生じて、それが戦の武器を生み出したのでしょうか。また、稲作や戦に伴う様々な祭りが新たにうみだされたようです。なお、山梨では発見されていませんが、西日本で数多く発見されている銅鐸は、稲の豊作祈願のための祭りの道具といわれています。館内にある銅鐸の音色を聞いてみましょう。これは弥生時代の銅鐸と同じ金属で作られていますので、遙か2,000年前と同じ音を聞くことができます。



金の尾遺跡(甲斐市)出土ガラス玉



長田口遺跡出土鏡片



金の尾遺跡出土磨製石鏃



銅鐸レプリカ

15. 弥生の墓から古墳へ

見学の重点

このコーナーでは、^{ほうけいしゅうこうぼ}方形周溝墓が発見されて全国的に注目された^{うえ だいら}上の平遺跡を取り上げています。上の平遺跡から出土した土器や、81号方形周溝墓の溝から出土した^{あわせぐち つぼかん}合口の壺棺(壺形の土器2個の口を合わせて遺体を入れる棺としたもの)などを展示しています。

①弥生時代に新しく造られた墓はどのようなものでしょう。パネルを参考に調べてみましょう。

弥生人の墓は時期や地域によって様々な形態のものがみられます。山梨県で発見された弥生時代の墓には、地面を長方形やだ円形に掘り下げて遺体を埋めた^{どこうぼ}土坑墓や方形周溝墓、小さな子どもを埋葬した壺棺墓などがあります。

甲斐風土記の丘・曾根丘陵公園内にある上の平遺跡は、昭和54(1979)年に55基の方形周溝墓が発見されて全国的にも注目された遺跡です。今では125基の方形周溝墓群が検出されています。方形周溝墓とは弥生時代から古墳時代前期に造られた墓制の一種で、方形に溝を巡らし、内側に土を盛り上げ、その中央部に土坑を掘って遺体を埋葬したものです。溝の一边が10～15mのものが多く、中には20m以上に及ぶものもあります。全国的な例では遺体は中心部の土坑内に埋葬されますが、溝の中にも埋葬することがありました。上の平遺跡でも一辺10m前後のものが多く、規模の大きさからいくつかの集団の共同墓地と考えられています。後世の開墾等により台状部は削り取られているために遺体を埋めた部分は確認されていません。溝からは棺に使われたと思われる壺が出土しています。壺に遺体や骨を納める壺棺の風習は、数は多くありませんが全国広い範囲で見られ、壺は口の部分を打ち欠いて、鉢や石で蓋をする場合が多いようです。上の平遺跡は、弥生時代から古墳時代への有力者が出現する過程を知る上で貴重な遺跡です。やがて古墳時代になると、首長だけが大きな高塚(古墳)に葬られるようになっていきます。また、今日では県内各地から方形周溝墓が複数発見されており、北杜市長坂町頭無^{かしらなし}A遺跡から方形周溝墓の中心に土坑が発見され、中から鉄刀や腕輪が発見されています。



上の平方形周溝墓群



上の平遺跡出土の土器



^{あわせぐち}合口壺棺